授業づくりグループ④

# 子どもと共につくりあげる生活につながる授業づくり
# ～保護者との連携をはかりながら～

岩沼見奈　野尻直人

## 1．テーマ設定の理由

### （1）グループ学習について

「グループ学習」とは本校中学部で行っている、国語・数学を中心に学習する授業である。年度当初、中学部の教師で個人差や習熟度、子ども同士の相性などを考慮し充分に話し合ってグループ編成を行っている。

昨年度の研究でも「グループ学習」を研究の対象として、コミュニケーションの場として捉えた「さんぽ」の実践研究、さらには「さんぽ」から拡がる活動内容を研究し、生徒と共に「わかる」授業づくりに取り組んだ。

### （2）生徒の実態について

本グループは、１年生１名、２年生１名、３年生２名、計４名で構成されており、担当教師は２名（活動内容によって３名）である。昨年度から３年生は同じメンバーである。長い時間、同じ場所に座って同じ内容の学習に取り組むことが苦手であり、その日の気分や体調によって教室に集まれなかったりもする。また教師に思いを伝えることなく活動場所を離れ、自分の思いをうまく伝えられずにかたくなな態度や表情を見せるときもある。しかし昨年度の研究実践から

・生徒の伝えたいことなどを見逃さずに拾い上げ、尊重しながら活動を共に展開していく
・同じ活動を長いスパンで繰り返し行うこと

により、カードや言葉によって互いの思いを伝えられるようになったり、落ち着いて活動に取り組めるようになったりした。そこで今年度も、昨年度の研究と同じ流れをくみ「グループ学習」「美術」「職業・家庭」を同じ活動内容で行ってきた。その中で以下のような生徒の実態が見えてきた。

・３年生の２名は自分から「さ・ん・ぽ」と言ったり、リュックを教師に手渡したりして「さんぽ」を要求し、自分で準備をして玄関へ向かう。
・１年生、２年生の２名は活動の場にいるが、興味は他のところにあり、なかなか活動に取り組めない。しかも、何に興味があるのかうまく伝えられずに、教室から離れたり、かたくなな表情になったりする。

### （3）今年度のグループ学習でのねらい

本グループの生徒の保護者や担任の願いには

・昨年度からのシール貼りで、かなり見て正しく貼れるようになってきているのを感じていますので、発展させてほしい
・昨年度から、グループ学習で自分の意志で活動していた部分を引き続き育ててほしい
・作業など手を使う学習に積極的に参加してほしい

などの昨年度から引き続いて、コミュニケーション面と学習面の願いがあった。

また昨年度の課題として、学校で取り組めるようになったことをどのように家庭生活に拡げられるか、さらには活動内容を検討する際に学校だけではなく家庭と連携をとりながら行う必要性を感じていた。

そこで今年度は、昨年度以上に保護者との連携を深めながら活動内容やねらいを設定していき、学校生活だけでなく家庭にも拡がる活動を取り入れていこうと考え、**「生徒が見通しをもって自ら活動し、そこに教師が一緒に活動することで実際の生活に必要なコミュニケーションを身につける」**ことを本グループのねらいとし、研究の対象に考えた。

## 2.「さんぽ」の実践

### （1）さんぽの活動について

1学期当初、Y男の保護者から下記の話を聞いた。

- 学校での「さんぽ」の取り組みから、家庭でも自分から靴下やジャンパーを身につけることで「さんぽ」を要求するようになり、外食を家族で楽しめるようになった
- これから家庭でもボランティアさんにかかわる機会を設け、その際にボランティアさんと一緒に「さんぽ」を楽しめるようになってほしい
- 学校で取り組んでいる「さんぽ」からボランティアさんと一緒に行ける場所を増やし、自分でお金を扱う経験も増やしたい

またU男がT男にリュックを担がせて一緒に「さんぽ」の準備をしたり、「さんぽ」の活動を通して友だちへ目を向けたりする様子も見られた。さらにT男やM子も「さんぽ」では落ち着いて教師と一緒に行動できていた。そこで以下の点から「さんぽ」をグループ学習の大きな柱として取り組むことにした。

- 本グループの生徒にとって「玄関に集合する→校外へ出かける→学校にもどる」という一連の流れがわかりやすく、身近な活動である
- 校外へ出かけることで学校内以上に生徒の興味・関心が拡がり要求場面、コミュニケーションをとる機会が増え、カードや言葉につながる活動となるのではないか
- 買い物学習など家庭でも取り組め、友だちを意識するきっかけとなる活動ではないか

### （2）さんぽでの個別のねらい

「さんぽ」でわかってきた生徒の実態から個人のねらいを設定した。

| | 「さんぽ」での実態 | 個人のねらい |
|---|---|---|
| T男<br>1年 | ・目的地が明確でないときは、集団から遅れて歩く<br>・自動販売機を見つけるとすぐに、財布を捜し出し「ジュースちょうだい」のサインを出し、一人で購入できる | ・目的地がわかり友だちと一緒に歩く<br>・「ジュース」と言葉で伝えてから購入する |
| M子<br>2年 | ・自転車が好きでなかなか降りず、集合に時間がかかる<br>・笑いながら自分のペースで歩き楽しんでいるが、立ち止まることが多く、一度立ち止まると再び歩き出すのに時間がかかる | ・カバンを見て「さんぽ」がわかり集合する<br>・目的地がわかり友だちと一緒に歩く |
| U男<br>3年 | ・出かけると「ジュース」と言ってコーラをとても強く要求する<br>・自動販売機をみると突然走り出し、声をかけても止まらないこともある | ・コーラ以外の「さんぽ」の楽しみを見つける<br>・友だちと一緒に落ち着いて歩く |
| Y男<br>3年 | ・ファーストフード店の場所を何となく知っており、お店に向かって歩く<br>・自分なりの道順があり、違う道へ誘導すると怒り出したり、動かなくなったりする | ・友だちと一緒に、いろいろな目的地に向かうことができる |

### （3）手だてと生徒の実態の変化

何度も取り組む中で、「さんぽ」での目的地やコース、さらにねらいや手だてなどを生徒の実態の変化にともなって、話し合い変えてきた。特にＹ男の変化について見てみる。

| 手だて（さんぽコース） | Ｙ男の主な実態（○Ｙ男の評価　◎次の課題） |
|---|---|
| ＊取り組みの当初<br>学校 → 緑地公園 → 学校<br>学校 → 学校周辺 → 学校 | ・友だちから離れて、違う道を歩きたがる。<br>・思いと違う道を誘導すると、怒り出したり動かなくなることがある。<br>・行きたいところへみんなで向かうと、決まってファーストフード店（マクドナルド店など）であった。 |
| ○しっかりとＹ男なりの地図ができているようだ | |
| ＊コースⅠ<br>学校 → マクドナルド 杜の里店 → 学校 | ・マクドナルドに繰り返し行くうちに、友だちと同じコースを歩くようになった。 |
| ○「さんぽ」の目的地がわかったことで、友だちと一緒に落ち着いて歩くようになった<br>◎Ｙ男の知っている他の店にも行ってみてはどうか | |
| ＊コースⅡ<br>学校 → ドムドム 武蔵が辻店 → 学校 | ・ドムドム店の写真カードを提示して目的地を知らせると、スムーズに友だちと向かいだした。<br>・満腹になるまで食べないと納得せず、座り込み学校に戻ることを拒否することが続いた。 |
| ＊コースⅢ<br>学校 → ドムドム → 金沢城内 ティータイム → 学校 | ・購入した袋を何度も提示し中身を一緒に確認することを繰り返すうちに友だちと一緒にスムーズに移動するようになった。<br>・金沢城内までの途中で飲食することが何度かあったが、次第に金沢城内まで落ち着いて移動し、ティータイムを友だちととることができるようになった。 |
| ◎目的地までの道順やティータイムを行う場所にバリエーションをつけられないか | |
| ＊コースⅣ<br>学校 → 近江町市場 → ドムドム → 金沢城 → 学校<br>学校 → 橋場町 → ドムドム → 学校 | ・ドムドム店のカードを提示すると違う道順でも友だちと集団で歩く。<br>・学校までどうしても我慢できずに、かたくなな態度になったり、立ち止まることが多くなった。 |
| ○Ｙ男にとって「さんぽ」の楽しみは校外での飲食であるようだ | |
| ＊コースⅤ<br>学校 → マクドナルド 香林坊店 → 学校 | ・ポテトのカードを見せると違う店舗にもスムーズに向かった。<br>・次第に、満腹にならなくても学校へ戻る気持ちへの切り替えがはやくなった。特に多くの友だちや先生がいる時は、集団の雰囲気についてスムーズに学校に向かうようである。 |
| ○Ｙ男なりに友だちを意識して歩いているようである<br>◎いろいろな今までのコースを、友だちと一緒に歩き、お店での飲食を楽しむ | |

＊今後は「コースⅠ～Ⅴ」のカードを準備し、目的地をわかりやすく示し、「友だちを待つ、友だちと席を並べる」などの活動を入れ集団、友だちをより意識する活動にしていきたい。

上記のように、Ｙ男はいろいろな場所への「さんぽ」を楽しめるようになってきた。他にもＴ男は飲み物を「おちゃ」「おかわりください」と言葉で伝え要求してくる。Ｍ子はカバンを見ると「さんぽ」に行くことがわかり、自転車を乗り終えてからの玄関での集合までが以前と比べるとスムーズになり、「ジュース」「じ～（自転車）」など言葉で伝えることが増えてきた。Ｕ男は目的地を明確にお店にしたためか、コーラを強くほしがることがなくなり、落ち着いて友だちと歩いている。

近江町市場を歩くＹ男

## 3「さんぽ」から拡がる学習活動

### （1）「さんぽ」から次の活動へ

このように「さんぽ」の活動を通して、互いにカードや言葉で伝えあうことが増え、友だちを意識するきっかけとなった。このことから生徒の好きな「さんぽ」はコミュニケーションを深めるよい場であったと思われる。

そこで2学期から、年度当初の保護者や担任の願いを参考にし、「さんぽ」で互いに深めてきたコミュニケーションを基盤にしながら「さんぽ以外の活動」に目を向け、校内で行う新しい授業の柱をつくっていくことにした。

友だちと一緒に歩こう！

### （2）「フェルトモビールづくり」と「てがみ」について

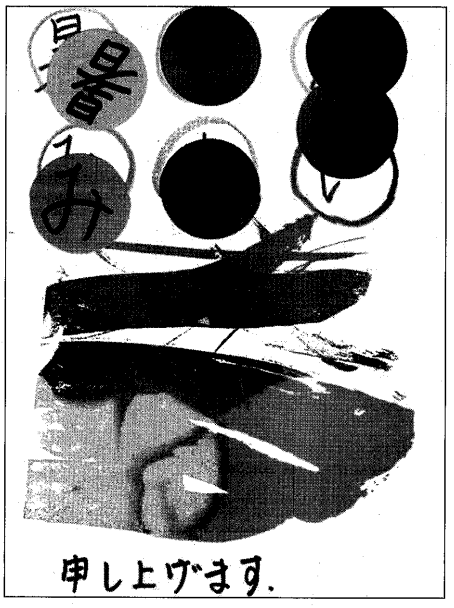
「フェルトモビールづくり」は、羊毛をちぎりながらボンドで布に貼っていきフェルトの原型を作る、ビーズを通した釘を流木に打つ、この2つの活動で構成されている。これまで本グループの生徒はボンドでビーズを貼る活動を繰り返し行っていた。そこで羊毛をちぎりながら貼る活動は、見通しのもちやすい活動ではないか、と考えた。またM子はビーズの感触を好まず、なかなか自分から触れようとしなかった。そのM子にとって羊毛の感触は心地よく、自分から手にとって取り組むのではないか、とも考えた。釘打ちは昨年度から引き続いている。自ら金槌を手に取り、集中して釘打ちに取り組んでいた。

「てがみ」も昨年度の研究から引き続いて行っており、平仮名や漢字のマッチングを、生徒が慣れているシール貼りで行い、いろいろな先生や友だちに手紙として届けている。シールの色から文字を見てマッチングするようになったり、マッチングできる文字数が増えたりしており、保護者とも家庭で一緒に取り組めるわかりやすい活動である。また手紙の交換によって人間関係の拡がりも期待できるのでは、と考えた。

### （3）「さんぽ」からの発展

「さんぽ」で互いにやりとりできるようになったカードや言葉を大切にするために、「フェルトモビールづくり・てがみ」以外に、教室以外の活動（自転車など）も認めた。また「さんぽ」でも取り組んだ生徒の好きな「ティータイム」も取り入れることにした。

これらの活動は生徒の体調や様子によって臨機応変に変えていくが、「①フェルトモビールづくり　②てがみ　③ティータイム」を授業の大きな流れとして、「美術」「職業・家庭」「グループ学習」の時間に行った。①～③などの違う内容の活動を組み合わせることで、それぞれの活動に集中しやすく、授業にも展開が生まれ、より長い時間机に向うのでは、と考えた。




「てがみ」～暑中見舞い編～

### （４）個別のねらいと実態

| | 「フェルトモビールづくり・てがみ」での主な実態 | 個人のねらい |
|---|---|---|
| Ｔ男<br>１年 | ・活動の途中で「おかわりください」と言ってお茶を要求する<br>・繰り返し行うなかで、活動の見通しをもって、教師と一緒に落ち着いて机に向かい、取り組むことが増えた | ・一連の活動に自分から落ち着いて取り組む<br>・お茶などがほしい時に言葉で伝える |
| Ｍ子<br>２年 | ・活動の途中で「じ～」と言って自転車に乗ることを要求する<br>・活動には教師とまねっこ遊びをしながら取り組む<br>・「てがみ」では枠を用意すると枠を意識して手元を見てシールを貼るようになった | ・お茶がほしい時や自転車に乗りたい時に言葉で伝える<br>・一連の活動を教師と一緒に楽しみながら取り組む |
| Ｕ男<br>３年 | ・教室を出歩く際に「しっこ」、活動の途中でお茶を「ちょうだい」と言って要求する<br>・活動の見通しをもって、教師と一緒に落ち着いて机に向かい、取り組むことが増えた | ・一連の活動に自分から落ち着いて取り組む<br>・お茶などがほしい時に言葉で伝える |
| Ｙ男<br>３年 | ・にぎやかな雰囲気が苦手で、静かな場所に出歩くことが多い<br>・お茶などがほしい時にサインで伝えてきたり、コップなどの実物を手渡したりして要求する<br>・活動の見通しをもっており、教師が促すと取り組む | ・教師とのかかわりを楽しみながら、教室で活動に取り組む<br>・お茶などがほしい時に、サインや実物で要求する |

### （５）生徒の実態の変化

「さんぽ」で互いにコミュニケーションをしっかりと取り合い、活動内容を生徒の実態にあわせることにより、１学期当初よりも落ち着いて取り組めた。

特にＴ男とＭ子は、「ほしいもの・したいこと」をうまく伝えられず、かたくなな表情になり教室から出歩くことが多かった。しかし「お茶・自転車」などの好きなことを活動に取り入れることにより、言葉で要求できるようになった。それに伴い教室に自ら集まり、活動にも教師と一緒に落ち着いて取り組めてきている。ここではＭ子について見てみたい。

| 手だて（活動場所） | Ｍ子の主な実態（○Ｍ子の評価　◎次の課題） |
|---|---|
| 教室 → 自転車<br>＊自転車のカードを指さしたら自転車へ一緒に行く | ・教室内での活動にはなかなか取り組めなかった。<br>・当初は教師が思いを組みカードを提示していたが、次第に自分からカードを指さすようになった。<br>・さらに「じ～」と言葉で要求するようになったが、自転車から教室に向かうことは難しい。 |
| ◎自転車に思い切り乗り、満足感を味わってから教室に向かってみてはどうか | |
| 自転車 → 教室 | ・「じ～」と教師の手を取り楽しそうに自転車に向かい、何時間でも自転車に乗る。<br>・教室に来ることは難しく、何度か無理に連れて来ようとしたが、かたくなな表情となった。<br>・活動には教師とまねっこ遊びをしながら取り組むが、途中で「じ～」と要求してくる。 |
| ○教室の活動の見通しがもてていないため、教室に来ることを拒むのではないか<br>◎教室での活動の見通しがもてるように、活動カードを準備し、活動が終わってから自転車に行くようにしてはどうか | |
| 教室 → 自転車<br>＊教室内での活動が全て終わってから自転車へ行く | ・カードで「～をしたら自転車」と伝えても、かたくなに拒み、時に泣き出すこともあった。<br>・次第に取り組む活動内容も増え、「てがみ」まで行うようになったが、「てがみ」の途中で怒り出すことが多くなった。<br>・「さんぽ」での活動では、自転車に乗っていてもカバンを見せて「おしまい」と言うと伝わり、自分から降りることもあった。 |
| ○「おしまい」の言葉が少しずつ分かってきたのではないか<br>○活動内容がM子にあっていないのではないか<br>◎ビーズ貼りから羊毛を扱った活動にし、「てがみ」でのシール貼りの量や手だてを考慮しM子が達成感や「おしまい」を味わえるような内容にしていく<br>◎M子が言葉で要求してきた時に一緒に自転車に向かい、「おしまい」と言って終わりを伝えていく | |
| 教室 → 自転車 | ・教室内での活動では「てがみ」まで教師と楽しみながら取り組めるようになった。<br>・「てがみ」が終わってから「じ～」と伝えてくるようになってきた。<br>・「おしまい」と言いしばらく待っていると、自分から自転車を降りるようにもなった。<br>＊今後は自転車以外の校内での楽しみを一緒に見つけていきたい。 |

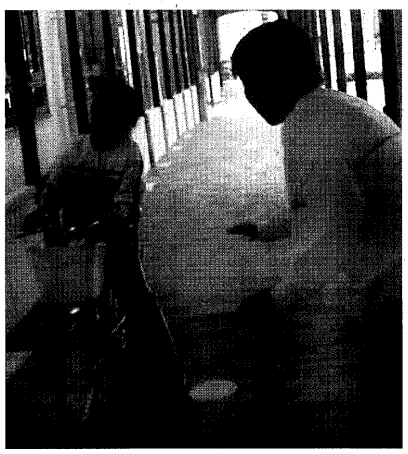
## ４．今後のグループ学習について

### （１）保護者のアンケート

これまでの授業の様子は何度かグループ通信にて保護者の方に伝えていた。「さんぽ」「校内の学習」ともに大きな柱ができてきたことも通信にて伝えた。そこで次の課題は「こ

れらの活動をどのように発展させるか」「家庭につながる他の活動を考えること」であると考え、保護者の方にアンケートをとることにした。

アンケート項目は「本グループ学習で取り組んでほしいこと」「子どもがつけてほしい力」である。その結果は下記のとおりである。そこから保護者が「さんぽに取り組み、買い物やマナーなど社会的なルールを身につけてほしい」「言葉や自分なりの方法で思いを伝える力をもっとつけてほしい」「箱に物をつめる、入れる・物をたたむ、折るなどの活動にも取り組んでほしい」という願いをもっていることがわかった。この結果を受け、生徒の実態を考慮し、今後これまでの活動を基本として下記の活動にも取り組もうとしている。



「じ～」乗りたい！

| 保護者の方からのアンケート結果 | これからの活動予定 |
|---|---|
| **<本グループ学習で取り組んでほしいこと>**<br>・いろいろな場所へ出かける<br>・大好きな散歩と買い物をさせてやってほしい | ＊「さんぽ」で買い物を取り入れお金を扱う場面を設定する |
| ・集中してする作業をそのまま続けてほしい<br>・今まで通りでいいです | ＊これまでの活動を引き続き行う |
| ・「物をつめる、入れる」「たたむ、折る」などの活動を取り組んでほしい | ＊「洗濯活動」を取り入れ、「たたむ」「かごに物を入れる」などの活動の場面を設定する |
| **<子どもがつけてほしい力>**<br>・ルールを守って待つことができるように<br>・静かにするところでは大声をださない<br>・「がまん」ができるように | ＊「さんぽ」や他の活動の中で取り組んでいく |
| ・自分の気持ちの伝え方にもう少し力がつけば<br>・「言葉」で要求をつたえてほしい | ＊「好きな活動」や他の活動に取り組む中で身につけてほしい |

## 5．まとめ

実践を通して、昨年度学んだ「生徒の伝えたいことやしたいことを見逃さずに拾い上げ、その気持ちを尊重しながら活動を共に展開していく」「同じ活動を長いスパンで繰り返し行うこと」の大切さを改めて感じた。さらに今年度、好きな「さんぽ」から友だちを意識するようになり、「自転車」から言葉や他の活動への意欲にもつながったことから**「生徒の好きな活動を取り入れた授業づくり」「好きな活動から拡がる活動や伝えようとする力（言葉など）」**の重要性も学んだ。

買い物学習に挑戦中！

また「生徒の生活」とは「学校」と「家庭」が含まれており、学校での取り組みが家庭に生かされ、家庭での取り組みが学校で生かされる。そのため「生活につながる活動」は本グループの生徒にとって大切であり、「学校」と「家庭」の連携が重要となってくるであろう。今年度は保護者とのグループ通信や直接の話やアンケートなどの取り組みによって、家庭での様子を知ることができ、「生活につながる活動」を考えるきっかけとなった。

今後、保護者との連携をこれまで以上に密に取り合い、生徒にとっての「生活につながる活動」をいろいろ見つけ、活動の幅を拡げることが課題であると考えている。